

PATRIMONY。PHILIP ROTH

父

フィリップ・ロス

の

柴田元幸 訳

遺産



[PRIMONY・PHILIP ROTH]

人

フィリップ・ロス

の

柴田元幸 [訳]

遺

産



PATRIMONY
by PHILIP ROTH
Copyright © 1991 by Philip Roth
Japanese translation rights arranged
with Philip Roth, c/o Aitken & Stone Ltd.,
London through Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo.

父の遺産
ちちのいさん

一九九三年一〇月一〇日 第一刷発行

著者 フィリップ・ロス

訳者 柴田元幸
しばた もとゆき

発行者 若菜 正

発行所 株式会社 集英社

一〇一五〇 東京都千代田区一ツ橋二一五—一〇
電話 編集部 (〇三三) 三三三〇—六〇九四

販売部 (〇三三) 三三三〇—六三九三

制作部 (〇三三) 三三三〇—六〇八〇

印刷所 図書印刷株式会社

©1993 Shueisha

本書の内容の一部または全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送りください。送料小社負担でお取り替えます。

目 次

1

で、
どう思う？

7

2

ママ、ママ、
どこに
いるんだ、
ママ？

23

3

わしは
ゾンビに
なるのか？

67

4

もう一度
生きはじめ
なくちゃ
ならん

129

5

イングリッドに最後まで
面倒を見てもいいな

165

6

闘う人間だから闘い、
ユダヤ人だから闘った

219

訳者あとがき

262

〔原写真〕

上から：ハーマン・ロス(父・36歳)

サンディ・ロス(兄・9歳)

フィリップ・ロス(4歳)

1937年・夏

ニュージャージー、ブラドリー・ビーチにて

父の遺産

私の家族、生者と死者に

1

で、
どう思う？

八十六歳に達したとき、私の父親は右目の視力をほとんど失っていたが、それを除けば、父の健康はこの歳にしては驚異的と言ってよかった。ところがある日フロリダで、麻痺が父を襲った。フロリダでのかかりつけの医者は、ベル麻痺との診断を（結局それは誤診だったのだが）下した。ベル麻痺はビールス性の感染症で、顔の半面に、たいていは一過性の麻痺をもたらす。

麻痺は何の前触れもなく現われた。例年通り冬の数か月間をフロリダで過ごしに、ニュージャージーから飛行機でウェストパーム・ビーチへ行った次の日のことである。フロリダでは、リリアン・ベロフという、かつて簿記の仕事をしていた七十歳の女性と一緒に、また借りのアパートメントに滞在することになっていた。リリアンは——みんなは彼女をリルと呼んだ——エリザベスの町で父と同じ建物の上の階に住んでいて、一九八一年に私の母が亡くなってから一年後に、父と深い仲になったのだった。ウェストパーム空港での父は元氣一杯で、ポーターさえ頼まず（そんなものを頼んだらチップを出さなくちゃならない）、バゲージエリアからタクシー乗り場まで、えんえん自分で荷物を運んでいた。それが翌日の朝、浴室の鏡を見ると、顔の半分がもはや自分のものでなくなってしまうて

いたのだ。前の日には自分の顔に見えたのが、いまはもう誰の顔にも見えなかった。視力をなくしたほうの目の下^{したまが}瞼^{まぶた}がだらんと垂れ下がり、瞼の裏側の縁が見えていた。同じ側の頬はまるで骨を抜かれたみたいに力なくたるみ、唇もはやまっすぐではなく、顔を斜めに横切っていた。

父は片手で右の頬を昨夜の位置に押し戻し、十数えるまで押さえていた。その朝何度も——そしてその後も毎日——同じことをくり返したが、手を離すとまた元に戻ってしまうのだった。寝た姿勢が悪かったんだ、眠っているあいだに皮膚に皺^{しわ}が寄ってしまったんだ、と父は自分に言い聞かせたが、本心では、卒中を起こしたんだと思っていた。父の父親も、一九四〇年代はじめに卒中で体の自由を失ったからである。自分も高齢の身になってから、父は何度となく私に、「親父みたいにはなりたくないよ。あんなふうに寝たきりになりたかないね。それが一番の心配の種だよ」と言ったものだった。病気の父親を抱えた父は、毎日朝早く、出勤の途中に病院へ寄って父親を見舞い、夜には帰宅の途中にもう一度立ち寄った。一日に二度、煙草に火をつけて父親の口に持って行ってやり、夜は枕元に座ってイディッシュ語の新聞を読んでやった。体を動かすこともできず、まったく無力のまま、煙草だけを唯一の慰めに、セクター・ロスとはほぼ一年近く持ちこたえた。そして、一九四二年のある夜ふけに、二度目の卒中がすべてに終止符を打つまで、私の父は毎日二度ずつ枕元に座って、自分の父親が死んでゆくのを見守ったのである。

ベル麻痺という診断を下した医者は、大丈夫、完全には言い切れませんがじきにだいたい消えますよ、と請けあった。そしてこの予測を聞かされて数日のうちに、父は三人の違った人物から、その

通りだと太鼓判を押された。三人とも巨大なコンドミニウムのなかの、父が滞在しているセクションの住人で、いずれもかつて同じ病気にかかって快復した人たちだった。そのうち一人は四か月近く治らなかったが、やがてはその麻痺も、訪れたときと同じように不可解に消滅したということだった。

父の麻痺は消滅しなかった。

まもなく右耳が聞こえなくなった。例の医者は耳を検査し、聴力を測ったが、ベル麻痺とは関係ありませんと父に言った。要するに歳のせいですよ、実はいままでも少しずつ弱っていたんじゃないですかね。右目と同じことで、いまはじめて気がついただけの話ですよ、と。ベル麻痺がなくなるまであとどれくらいかかるんですか、と父がもう一度訊いてみると、今度は医者は、あなたくらい長く続いた麻痺の場合、まったく消えないこともあります、と答えた。悪いところばかり考えちゃいけない、と医者は言った。片目が見えなくて、片耳が聞こえなくて、顔が半分麻痺している以外は、あなたは二十も歳下の人間並に健康なんですよ。

毎週日曜日に私が電話をかけても、口が垂れ下がって発音が不明瞭になったせいで、父の話はひどく聞き取りにくくなってしまった。時にはまるで、歯医者椅子から下りたばかりの、まだ麻酔も切れていない人間みたいな喋り方だった。そして飛行機でフロリダまで出かけて行って、父の姿を目のあたりにしてみると、一言も喋れそうにないときえ思えるその様子に私は仰天してしまった。

「で、どう思う？」と父は待ち合わせ場所のロビーで言った。リルも入れて三人で食事をしようと、私が泊まっているホテルのロビーで待ち合わせたのだが、私がかがみ込んでキスするのも終わらぬは

しから、開口一番そう言ったのである。リルと並んで、つづれ織りの掛かったソファに父は身を沈めていたが、顔はまっすぐ私に向けて上げていたので、その有様は私にも一目でわかった。ここ一年ばかり、父は時おり、見えなくなったほうの目に黒い眼帯をつけて、光や風の刺激から守っていたが、この眼帯に加えて頬や口もそんな具合だし、おまけに体重もめっきり減ってしまったこともあって、五週間前にエリザベスの町で会ったときとはまるで別人の弱々しい老人に変身してしまったように見えた。ほんの六年前、母が亡くなった次の冬に、昔からの友人ビル・ウェバーがバル・ハーバーに持っているアパートメントに泊まっていたときには、同じ建物に住む金持ちの未亡人たちを相手に、つい先日七十歳になったところでしてね、と言っていたのけても、誰も疑いはしなかった。実のところは、その前の夏に、コネチカットの私の家にみんなで集まって、八十歳の誕生日を祝っていたのだ。真新しいシアサッカーのジャケットにバステルカラーのスラックスをはいた社交的な男やもめが出現したのを見て、未亡人たちは興味津々父のまわりに群がったものだ。いまとなつてはそれも信じがたい話だった。

ホテルでのディナーの最中に、ベル麻痺というものが、顔の変形に加えて、どれほどの肉体的ハンディキャップをもたらすものかが、私にも少しずつわかってきた。いまや父は、飲み物をきちんと飲むにもストローが必要だった。さもないと、せつかく口に入れても、麻痺したほうの半分からあらかたこばれてしまうのだ。食べる行為一口一口が、焦燥と気まずさに満ちた苦行だった。スूपでネクタイを汚してしまつたあと、父はしぶしぶ、リルが首にナプキンを巻くのを許した。膝にもすでにナ

プキンが一枚広げてあって、ズボンはとりあえず護^{まも}られている。リルは時おり、自分のナプキンを持った手を伸ばして、父の不快そうな顔に耐えながら、口から滑り出て顎にくっついた食べ物（本人は気づいていない）を拭き取ってやった。食事中、リルは何度も父に、フォークに刺す食べ物の量を少し減らしたほうがいいとか、口に入れる量ももうちょっと控え目にしたほうがとか忠告を与えた。「わかつてる」と父は鬱々とした表情で皿を見下ろしながら呟^{つぶや}いた。「わかつてる、わかつてるよ」。

でも二、三口食べると、また忘れてしまうのだった。体重が激減し、見るからに栄養不足になってしまったのも、元はといえば、このように食事という行為が、気の減入る試練になってしまったせいだった。

さらに厄介なことに、両目の白内障が最近一段と進行してきていて、見えるほうの目も像がだいぶぼやけてきていた。ここ数年、父の白内障の進行状況に関しては、私自身もニューヨークに出てくると診^みてもらっている眼科医デイヴィッド・クロンが逐一把握していてくれて、次第に衰えてきた視力にも対処してくれていた。三月になり、フロリダでの不幸な滞在を終えてニュージャージーに戻ってくると、父はさっそくニューヨークに出かけて行って、いいほうの目の白内障手術をしてくれとデイヴィッドをせっついた。ベル麻痺についてはどうしようもないので、せめて視力だけは何とかしよう、と、父としてもいっそう熱心に行動に出たわけである。だが、父の来院を受けた翌日の夕方、デイヴィッドは電話をかけてきて、もう少し検査をして顔の麻痺と聴覚の衰えの原因をつきとめないことには、目の手術は無理ですね、と返事をしてきた。いまのままでベル麻痺かどうかかも確信が持てな

い、というのである。

デイウィッドの疑念は正しかった。近所のかかりつけの内科医ハロルド・ワッサーマンに世話してもらって、デイウィッドが指示してきた通りのMRIの検査を受けたところ、ラボラトリーからの報告を受け取ったハロルドがさっそくその日の夕刻に私に電話をくれて、結果を伝えてくれた。脳腫瘍がある、ということだった。それも「相当大きな腫瘍」で、MRIでは良性か悪性かは判断できないけれども、「どちらにしろ命取りになる腫瘍です」とハロルドは言った。次のステップは、神経外科医に診てもらって、いかなる種類の腫瘍かを見きわめ、どんな手を打ったら——打つ手があるとして——いいかを考えることだった。「私としては樂觀していません」とハロルドは言った。「あなたも樂觀すべきじゃないですね」

MRIの結果を知らせずに父を神経外科に連れていくのには、ちょっとした細工が必要だった。私は父に嘘をついた。どこも悪いところは出てこなかったんだけど、デイウィッドとしては念には念を入れて、顔の麻痺に關してもう一人別の人間の意見を聞いてから目の手術にかかりたいそうなんだ、と。それと並行して、私はMRIの写真をニューヨークのエセックスハウス・ホテルに送ってもらうよう依頼しておいた。私がクレア・ブルームと一緒に、マンハッタンにアパートメントが見つかるまで一時滞在しているホテルである。十年にわたって、ロンドンにあるクレアの家と、コネチカットにある私の家とを往復しつづけてきた私たちは、マンハッタンに住居を確保する計画を立てていたのだ。放射線科医の報告書を添えたMRI写真が特大の封筒に入れられてホテルに届く一週間前に、クレ